

### よい仕事おこしネットワーク



関西電子(東京・大田)が開発したナノファイバー紡糸装置の技術応用で量産される「ナノファイバー」の活用をテーマにしている。同社は創業時から放射線計測機器や理化学機器を中心に事業を手がけ知見や技術を蓄積。新規事業への展開で最先端のナノファイバー素材を紡糸量産する装置を開発し2017年に特許を取得した。これまでナノファイバーは大量生産が難しく高価で用途開発も進んでいないが、同社装置の溶解方式でナノファイバー紡糸を1時間8時間と大量に生産する。繊維の種類もポリプレレンやポリエステルといった代表的な化成品から生分解性のポリ乳酸、複合原料までナノファイバーにできるという。

NW事務局の城南信用金庫専務理事の上原秀生氏は「再生できる新素材で今回の原料は再生ペレット。吸水、防音、保温の機能に優れSDGsの実装という観点でも意義深いと思います」と話す。手を挙げたのは明治大学と千葉商科大学。今年7月にキックオフとして実際に関西電子を訪問、8、9月にかけて夏休みを利用し新商品のアイデアを練り上げた。

今月2日に都内で開かれた明大生のプレゼンテーションで、商学部の小川智由教授は「企業以上に大学にも社会貢献が求められている時代になっています」と企業と大学ができることを模索する。大学内で4カ月3万超えるペットボトルのリサイクルも「無意識のSDGs」と位置付け、今回、その行く末を意識した。



# 新素材と学生の発想つなぐ

全国信用金庫が組織するよい仕事おこしネットワーク(NW)が再生可能な新素材を活用した新商品や新たなサービスを学生の自由な発想で開発する取り組みを進めている。NWがプラットフォームの役割を果たし大田区の中企業と学生をつないだ。これを起点に具体的な商品化に向け、共同開発を進めていく考えだ。

## ひと夏の研究成果 プレゼン



「体験型プロジェクト」の一環で推進した千葉商科大からも介護を意識した洗濯できる敷きパッド、土壌分解される育苗ポットなどの案が出た。各市町村にナノファイバー製造機を設置して地域活性化や雇用につなげるといったサービスも出た。

アンケートでの現状分析、会社ロゴを入れる広告効果、人を助ける、地域を盛り上げる——といったセカンドストーリーをどの商品も持っている点は今どきの若者らしい。「すべての人に健康と福祉を」というSDGs目標を自然に組み入れているところも時代を映し出している。

プレゼンを受けた関西電子の近藤正博・取締役は「あと『ひとひねり』が欲しい」と、抗菌や断熱性をもつ新たな素材との組み合わせなどを具体的に提案して学生たちの背中を押す。心からプレゼンを染しんだ、という進士園広社長は「ナノファイバーの素敵さが改めてわかりました。ここまで成果が出るとは思わなかったです」と率直な感激を表した。もうひとつ、ふたつ磨き上げれば世に出して素晴らしい商品になるという手応えがあったようだ。今回の商品案を展示してブラッシュアップする方針だ。ただ、「これを誰がやる、人材をどう確保する」ということが重要。具現化しないと話で終わってしまいます(近藤氏)。

今回、再生ペレットを提供した「資源革命」のリーダーとなることを目指すトムラ・ジャパン(東京・中央)の佐藤達副社長も「わずか3カ月で仕上げたアイデアは素晴らしいです。それを現実結び付ける、実現化することがビジネス」と今後の課題を指摘。日本のオンラインワン、底力を見せるという段階を見据えている。城南信金専務理事の坂本直幸氏は「(プレゼン)スキルも説得力もあつた。的確な指導、真剣な取り組み姿勢でレベルも高いと感じます」と総評を述べた。

学生自らが将来役立つことを考えることや地域の産学連携の橋渡しとなることはNWの意義そのものだろう。今回の企画案が採用となれば磨きをかけて、商社などに提案していく。

大学生だけでなく15日にはサレジオ工業高専の学生の発表も行われ、キューブ状のブラステックにナノファイバーを入れた靴の消臭剤、植物栽培キットといった柔軟性あふれる提案が出てきた。

明大社会連携機構課題解決型学習・PBL(問題解決型プロジェクト学習)の一環で4人1チームとして公募、マーケティング研究会所属の1年生チームが書類審査を通過した。指導した中山千尋特任講師はプレゼンの場で「ぜひ忌憚なき意見を下さい」と会場からの本音を促した。

「アクティブラーニング」(体験型プロジェクト)の一環で推進した千葉商科大からも介護を意識した洗濯できる敷きパッド、土壌分解される育苗ポットなどの案が出た。各市町村にナノファイバー製造機を設置して地域活性化や雇用につなげるといったサービスも出た。

アンケートでの現状分析、会社ロゴを入れる広告効果、人を助ける、地域を盛り上げる——といったセカンドストーリーをどの商品も持っている点は今どきの若者らしい。「すべての人に健康と福祉を」というSDGs目標を自然に組み入れているところも時代を映し出している。

プレゼンを受けた関西電子の近藤正博・取締役は「あと『ひとひねり』が欲しい」と、抗菌や断熱性をもつ新たな素材との組み合わせなどを具体的に提案して学生たちの背中を押す。心からプレゼンを染しんだ、という進士園広社長は「ナノファイバーの素敵さが改めてわかりました。ここまで成果が出るとは思わなかったです」と率直な感激を表した。もうひとつ、ふたつ磨き上げれば世に出して素晴らしい商品になるという手応えがあったようだ。今回の商品案を展示してブラッシュアップする方針だ。ただ、「これを誰がやる、人材をどう確保する」ということが重要。具現化しないと話で終わってしまいます(近藤氏)。



ナノファイバーは「綿状」など用途に合わせた形にできる

スーツ姿で緊張した面持ちの明大生